

沖縄戦 1945年 — 滋賀県出身の兵士がたどった道 —

(会期：令和元年6月8日～9月23日)

語りつぐ 平和へのわがし
SHIGA PEACE MUSEUM

滋賀県平和祈念館 第23回企画展示

沖縄戦 1945年

— 滋賀県出身の兵士がたどった道 —

令和元年(2019年)

6月8日土 - 9月23日月 <入館無料>

開館時期 / 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日 / 月・火曜(7/17～8/31は 휴休)
駐車場 / 約50台(無料)

詳しくはホームページ
L!がかんバーチャル平和祈念館にてご覧ください。

L!がかん(=デジタル平和祈念館) 検索

滋賀県平和祈念館 〒527-0137 滋賀県東近江市下野野131番地
TEL / 0749-46-0300 FAX / 0749-46-0350 E-mail / hwaipa@pref.shiga.lg.jp

滋賀県平和祈念館 第23回企画展示 沖縄戦 1945年 — 滋賀県出身の兵士がたどった道 —

昭和20年3月の沖縄県への米軍上陸に始まった地上戦は激烈をきわめた戦闘でした。20万人を超える沖縄戦戦没者のうち日本軍関係者の犠牲者は約9万4千人(うち約2万8千人が沖縄県出身者)、沖縄県住民の犠牲者も約9万4千人、米軍側が約1万2千人にのぼります。

この激しい戦闘の前半戦において最前線に立ったのが、京都で編成された第62師団(『石部隊』)でした。部隊には京都府・福井県・三重県とともに多くの滋賀県出身者が含まれていました。今回は、郷土部隊のゆくえとともに、戦場となった当時と現在の沖縄県の様子を紹介いたします。



写真：沖縄県立歴史博物館

【学芸員による企画展示説明会】

※6月22日(日) 13:30～

【平和学習講座】

- ・第1回 ※6月16日(日) 13:30～15:00
「沖縄摩文仁の丘の慰霊塔・
碑文が語りかける戦争の記憶」
堀島 実寿 氏(大谷大学文学部歴史学科教授)
- ・第2回 ※7月14日(日) 13:30～15:00
「沖縄戦没者慰霊碑が伝えるもの」
上杉 和夫 氏(京都府立大学文学部歴史学科教授)

【地域交流室】

- 「滋賀の戦跡パノラマ」
※7月3日(水)～9月1日(日)
- 「戦時中の体験
勉める 感じる そして考える」
※9月4日(水)～12月22日(日)

【映画会】

※いずれも13:30から

- ・6月23日(日)「グレート・ディベーター」
- ・7月28日(日)「アウシュビッツ行き最終列車」
- ・8月25日(日)「夏の庭 The Friends」
- ・9月22日(日)「命のビザ」

【平和を祈念する日事業】

- ※8月13日(火)～15日(木)
- 各詳細は必ずご確認ください。

平和祈念館からのお知らせ

- 体験談に関して
滋賀県平和祈念館では、国内外で戦争を体験した方の体験談を募集しています。対象は現在生活者にお住まいの方、またに滋賀県に帰郷して戦争・戦下の生活を経験した方です。詳しくは館内からお問い合わせいたします。特に沖縄戦に関する体験談を多く募集しています。
 - 資料寄贈に関して
戦没者の功績、戦時中に行った出来事、戦後生活の苦難、歴史を伝える資料などを、戦没者や関係者のご家族からご寄贈いただければ幸いです。また、資料に関する戦争体験談を希望の士子・記者・学生、メディア等の公募(子ども向け)も受け付けています。みなさまのご協力をお願いします。
- 詳しくは「滋賀県平和祈念館」までお問い合わせください
TEL / 0749-46-0300 FAX / 0749-46-0350
E-mail / hwaipa@pref.shiga.lg.jp



企画展示チラシ (表・裏面)

ごあいさつ

昭和20年3月の沖縄県への米軍上陸に始まった地上戦は激烈をきわめた戦闘でした。20万人を超える沖縄戦戦没者のうち日本軍関係者の犠牲者は約9万4千人(うち約2万8千人が沖縄県出身者)、沖縄県住民の犠牲者も約9万4千人、米軍側が約1万2千人にのぼります。

この激しい戦闘の前半戦において最前線に立ったのが、京都で編成された第62師団(『石部隊』)でした。部隊には京都府・福井県・三重県とともに多くの滋賀県出身者が含まれていました。今回は、郷土部隊のゆくえとともに、戦場となった当時と現在の沖縄県の様子を紹介いたします。

最後になりましたが、今回の企画展示におきましては、沖縄県公文書館、公益財団法人沖縄県平和祈念財団、防衛研究所戦史研究センター、七里伝夫様より多大なご協力をいただきましたこと、深くお礼申し上げます。

令和元年6月8日

滋賀県平和祈念館



展示風景（パナ－写真：白旗の少女〔沖縄県公文書館所蔵〕）

第1章 沖縄戦の経過

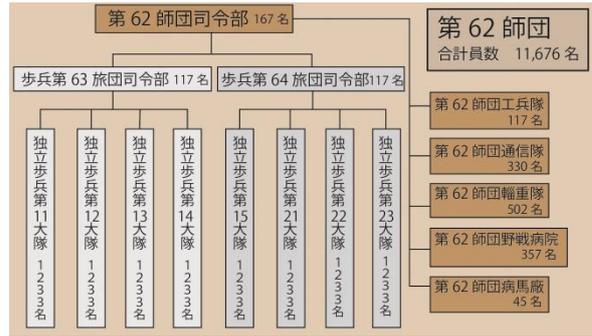
沖縄へ向かった郷土部隊 第62師団『石部隊』

戦前の日本では国民皆兵制度のもと、健康な男子は20歳になると兵役につくことが義務付けられていました。

兵士となった人々は、出身県ごとに決められた師管区に集められ、そこが担当する師団や部隊に振り分けられました。通常、1つの師管区は近くの2~4県が割り当てられており、滋賀県の場合、京都府・三重県・福井県とともに、京都師管に属していました。滋賀県の人々は、京都師管で編成・補充された師団・部隊を親しみを込めて「郷土部隊」と呼びました。

日本陸軍第62師団は、多くの滋賀県出身者が所属した「郷土部隊」の1つです。昭和18年（1943年）6月、北支（中国大陸の華北平原周辺）の日本軍占領地での治安維持や警備を目的として編成されました。師団は情報が漏れることを防ぐための暗号名「石」を冠して、「石部隊」と呼ばれました。石部隊は、中国国民党軍や中国共産党軍との戦闘を繰り返しながら、河南省や山西省の各地を転戦しました。

昭和19年（1944年）8月16日、石部隊に所属する滋賀県出身の兵士達の多くは、行先を告げられないまま、上海から沖縄へ向けて出港しました。



第62師団組織図（昭和20年1月時点の編成員数）

昭和20年陸軍省作成の『第32軍編成人員表』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）による。

第32軍編成人員表 陸軍省作成、昭和13年~昭和20年（防衛研究所戦史研究センター所蔵）

沖繩へ移動させる将兵数 865名（昭和19年7月31日編制）

沖繩での増員を予定した将兵数 1,233名（昭和20年1月編制）

陸軍省が作成した独立歩兵第13大隊の編制表です。表の数字を満たすため、不足する員数分の徴兵・動員が滋賀県や沖縄県などで行われました。数字は、日常生活から切り離されて戦場へ向かわれた方々の数を示しています。

第62師団 独立歩兵第13大隊編成人員表

—戦時下の沖縄の人々—

〔沖縄県公文書館所蔵写真〕





〔沖縄県公文書館所蔵〕

沖縄戦前夜

沖縄を守備する日本陸軍第32軍は、昭和19年(1944年)7月のサイパン島の陥落を受けて、沖縄での戦争に備えて増強されました。第32軍は、沖縄本島に司令部や第62師団(石部隊)、第24師団、第9師団、独立混成第44旅団などの部隊を置き、徹底した持久戦を行うため、数多くの陣地や飛行場を造りました。兵員不足を補うため、少年・少女を含めて、数万人もの沖縄県住民を軍人・軍属として動員しました。

昭和19年(1944年)10月、米軍は日本本土攻略の中継・補給拠点とするため、沖縄攻略を決定しました。「アイスバーグ作戦」と呼ばれた沖縄攻略作戦は、日本軍を大きく凌駕する18万人もの上陸部隊のほか、36万人以上の支援部隊や多数の艦船・航空機、大量の物資・弾薬を用いた太平洋戦争における米軍最大規模の上陸作戦でした。

島外からの補給・増員が期待できない第32軍は、制空権・制海権を確保し、兵力・物資・兵器のいずれもが勝る米軍に対して、沖縄県住民を巻き込んだ持久・消耗戦を展開することとなりました。



パナール写真：沖縄本島へ上陸する米軍【沖縄県公文書館所蔵】

沖縄戦の経過1 米軍上陸～首里攻防戦

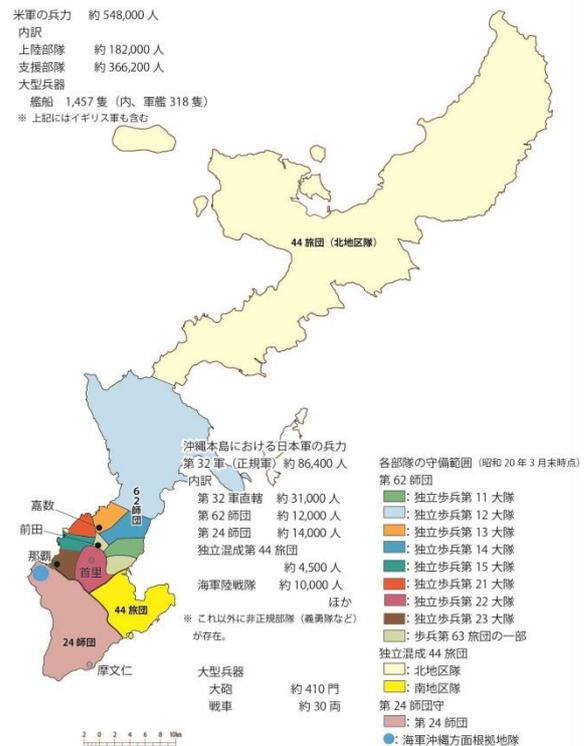
昭和20年(1945年)4月1日、米軍は艦船や飛行機から砲弾・爆弾の雨を降らせた後、沖縄本島読谷・北谷海岸へ上陸しました。

4月8日、南下した米軍は嘉数高地からの猛攻を受け、前進を阻まれました。そこは、首里に置かれた第32軍司令部を守る要塞の主要な陣地でした。

首里北側の地区を守っていた第62師団(石部隊)は、迫撃砲や戦車による激しい攻撃に対して、地下トンネルを多用した陣地(地下壕陣地)に籠もって対峙しました。物量に勝る米軍は、戦車・火炎放射器などを使って、嘉数高地・前田高地などの陣地を攻略し、5月21日には司令部の北側の約1kmにまで迫りました。



米軍の砲撃【沖縄県公文書館所蔵】



沖縄戦における日米の戦力比較

『沖縄県史各論編6 沖縄戦』(沖縄県教育委員会、2017年)・昭和20年陸軍省作成の『第32軍編制人員表』(防衛研究所戦史研究センター所蔵)などを参考に作成



嘉数高地付近へ進撃準備中の米軍戦車大隊
〔沖縄県公文書館所蔵〕



日本軍の地下壕陣地〔沖縄県公文書館所蔵〕

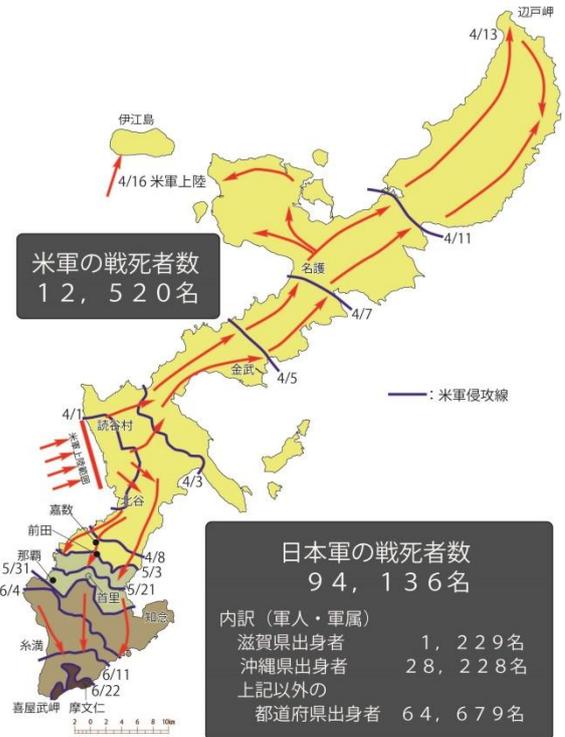


日本軍に砲火を浴びせる火炎放射戦車〔沖縄県公文書館所蔵〕

沖縄戦の経過 2 摩文仁への撤退～終戦

昭和 20 年 (1945 年) 5 月 22 日、第 32 軍は米軍が迫る中、司令部を喜屋武半島の摩文仁へ撤退させ、戦闘を継続することを決定しました。兵力が開戦当初の 4 割以下の 3 万人まで減っていた第 32 軍は、南風原、津嘉山、真栄里高地などの各地で応戦しましたが敗退し、6 月 23 日の牛島司令長官、長参謀長の自決により、日本軍としての組織的な戦闘を終結しました。

司令長官が戦闘停止命令を出さずに自決したため、その後も多くの日本軍兵士が戦闘を継続し、米軍によって掃討されていきました。また、喜屋武半島に避難していた沖縄県住民約 3 万 2 千人もの方々が戦闘に巻き込まれて亡くなりました。



米軍の侵攻経過と両軍の戦死者数

- ・沖縄戦の戦死者数は、昭和 51 年 (1976 年) 3 月の沖縄県援護課発表による。
- ・滋賀県出身者の沖縄戦死者数は『滋賀県史 昭和編第 2 巻』(滋賀県、1974 年) による。
- ・米軍侵攻経過は『沖縄県史各論編 6 沖縄戦』(沖縄県教育委員会、2017 年) と「沖縄本島 (南部) 配備要図および米軍進出経過図」(『戦史叢書 11 沖縄方面陸軍作戦』防衛庁防衛研修所戦史室、1968 年) を参考にして作成。



瓦礫と化した首里城の城壁〔沖縄県公文書館所蔵〕



米軍兵士による自然壕（ガマ）への攻撃
【沖縄県公文書館所蔵】



壕から投降する日本兵【沖縄県公文書館所蔵】

日米両軍の戦術

第32軍の強固な地下壕陣地は防御面だけでなく、トンネルと複数の出入口を使った敵背後からの奇襲や隣接する部隊への支援など、攻撃面でも優れたものでした。これらは周辺陣地や砲兵隊と連携した防衛線を形成していました。

緒戦の米軍は、兵士による自爆攻撃で戦車を破壊されるなど、防衛線の攻略に苦戦を強いられました。戦車と歩兵が連携した部隊による「馬乗り」攻撃によって、地下壕陣地を攻略していきました。「馬乗り」は、壕入口への戦車砲や火炎放射攻撃で敵兵を壕内に封じ込め、その隙に壕上の丘陵を占拠。壕入口を封鎖後、削岩機などで天井に攻撃穴を開け、爆薬・ガソリンなどで壕内の敵兵を全滅させる攻撃でした。



地下壕陣地（読谷飛行場付近）【沖縄県公文書館所蔵】



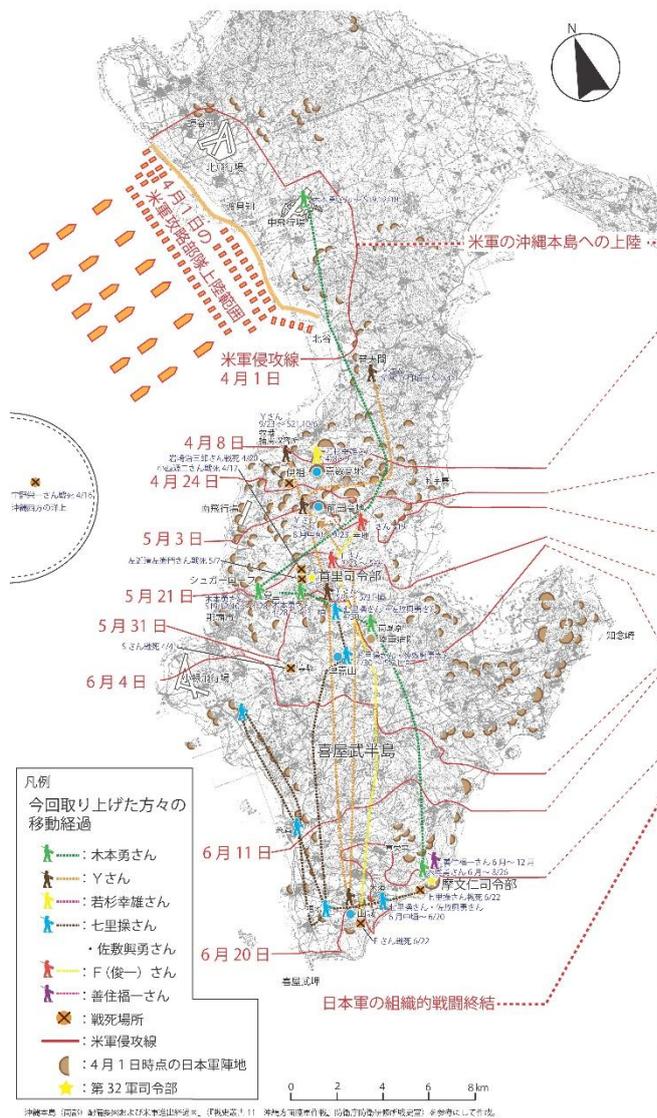
地下壕陣地の入口を包囲し、爆弾を投げ込む米軍兵士
【沖縄県公文書館所蔵】



火炎放射戦車による攻撃【沖縄県公文書館所蔵】



火炎放射戦車と共に前線へ移動する歩兵
【沖縄県公文書館所蔵】



年 月 日	今回取り上げた方々の沖縄戦の経過
昭和十九年(1944年)	3月20日 沖縄を占領する第32軍が編成される。(第62師団はその主力師団) 8月29日 第62師団(7石部隊)が中国から沖縄へ移駐。 8月～ 沖縄各地に飛行機や防衛陣地を構築。 昭和20年 3月頃 この頃、歩1大隊(石)の本木勇さんと中飛行機建設のために派遣される。 工兵隊(石)のFさんは平地周辺の陣地を構築。 10月10日 米軍による沖縄への大規模な空襲。那覇市などに大きな被害。 陸軍隊(石)のYさん。普天間の陣地で空襲を受ける。 11月17日 第32軍所属の第6師団の台冷結末が決まる。 12月3日 第32軍が首里を司令部とする。 12月10日 本木勇さん、歩1大隊(石)から第32軍司令部副官部へ出向。
昭和二十年(1945年)	2月 Oさん(独立混成第44師団) 沖縄で戦死。 3月26日 米軍が沖縄の慶良間諸島へ上陸。 4月1日 米軍が沖縄本島諸谷・北谷海岸へ上陸。Yさんが普天間陣地で米軍上陸を自撃。 4月1～4日 歩1大隊(石)が米軍上陸部隊と交戦。南部への誘導を企図して協攻。 4月4日 Sさん。那覇市高敷方面で戦死。 4月6日 吉田信太郎さん。沖縄への航空機による特攻で戦死。 宇野栄一さん。沖縄への特攻で出撃。飛行機の故障により九州へ帰還。 4月8日 歩1大隊(石)など第6師団所属の各部隊が守る嘉数高地周辺の陣地(伊庭～高敷～和宇慶)防衛線を米軍が攻撃。 4月9日 歩1大隊(石)所属の若杉小島(歩)中隊。嘉数高地で追撃攻撃により負傷。 4月16日 宇野栄一さん。知覧飛行場から沖縄へふたたび出撃し、沖縄西方洋上で戦死。 4月17日 小西源二さん。首里にて戦死。 4月19日 米軍が歩21大隊(石)の中守る伊祖陣地を占領。 歩21大隊(石)歩15大隊(石)が伊祖陣地を占領するが撃退され、多数の兵士が死傷。 岩崎治三郎さん。伊庭で戦死。 4月21日 第62師団所属の各部隊が嘉数高地などを後方の陣地へ撤退。 4月23日 第24師団が平地以南の陣地に投入される。(第62師団の防衛範囲が前田高地以西となる) 4月26日 前田高地を守る歩12大隊(石)が米軍と交戦し、5月9日に撤退。 5月19日 Yさんが前田高地で爆雷を背負い敵の戦車に体当たりする多数の兵士を自撃。 4月28日 本木勇さん。特別編成隊に配置され、首里司令部を攻撃。 4月30日 七里操さん。第62師団より64旅団(石)司令官(津嘉山山岡)の通信分隊長として派遣される。 5月7日 左近清左衛門さん。首里方面で戦死。 5月12日 シューローフの戦い。18日に米軍が突破。 5月22日 第32軍が首里司令部を放棄し、善屋武平島への撤退することを決定。 5月26日 第62師団司令部が善屋武平島へ内けて撤退を開始。前回の各部隊も5月31日までに撤退。 本木勇さんの部隊は首里から厚文仁へ、前田高地(石)のYさん・工兵隊(石)のFさんは首里から山越へ向けて撤退。64旅団(石)の七里操さんは津嘉山から部地へ向けて撤退。 米軍が善屋武平島を占領。 6月1日 小塚にあって善屋の沖縄方面撤退部隊が築城。 6月4日 64旅団(石)が部地から米軍へ撤退。 6月下旬 第62師団の各部隊が糸満市南部の山越・良平・厚文仁などで戦死。 64旅団(石)司令部。米軍付近の所で米軍の攻撃を受けて壊滅。七里操さん・佐敷興勇さん(善屋前に第62師団への復讐命令を受け、交戦中の部地から厚文仁へ向けて移動。 Fさん。山越で米軍と交戦し、22日に戦死。 6月19日 6月22日 七里操さんが厚文仁で戦死。第62師団防衛範囲が自決。 第32軍牛島司令官・長参謀長の自決。沖縄での日本軍の組織的戦闘が終結。 6月23日 善住福一さん。牛島司令官からの自決に立ち会う。佐敷興勇さんが戦線を離脱。 6月下旬～8月上旬 本木勇さん。厚文仁付近の陣地に潜伏。水くみ機で米兵にみつかり、攻撃を受けて負傷。 8月中旬 Yさん。山越から前田高地の崖へ移動中の夜、アメリカ軍の砲撃を浴びるような光景を見る。 8月19日 戦争終結の報が放送される。(玉音放送)終戦。Fさんの沖縄特攻が中止となる。 8月中旬 Yさん。前田高地の陣地に潜伏。 8月26日 本木勇さん。機内で兵士の自決に巻き込まれて負傷。投降し、捕虜収容所で治療を受ける。 8月～ 9月下旬 Yさんらが潜伏する前田高地の崖へ米兵が頻りに砲撃を受ける。 9月7日 沖縄の日本軍の降伏調印式が行われる。 9月23日 Yさん。投降して後方の捕虜収容所へ移送される。 昭和21年 本木勇さん・Yさん・善住福一さん。沖縄から滋賀県の自宅へ帰る。 昭和21年頃 岩崎二之助さん・左近とみさん・Fさんたちへ。出征した家族の沖縄での戦死を伝える知らせが届く。 平成20年 沖縄県糸満市厚文仁の洞窟での探検隊中、七里操さんの万年筆が発見される。 平成25年 1月27日 七里操さんの万年筆が発見後68年を経て、ご遺族のもとへ帰る。

パナー：沖縄戦経過図(今回取り上げた方々の戦争経過)

「沖縄本島(南部)配備要図および米軍進出経過図」

(『戦史叢書 11 沖縄方面陸軍作戦』防衛庁防衛研究所戦史室)を参考にして作成

第2章 沖縄へ従軍した滋賀県出身者 嘉数高地の戦闘

嘉数高地を守る第62師団独立歩兵第13大隊は、数多くの地下壕陣地・トーチカからの攻撃や、爆雷を背負った兵士が戦車に飛び込む自爆攻撃などによって、米軍の侵攻を2週間近く阻止しました。

米軍が嘉数高地を迂回し、その両側の伊祖陣地や和宇慶陣地を攻略した結果、第32軍は昭和20年(1945年)4月21日に部隊を後方の陣地へ撤退させました。



嘉数の丘の地下壕陣地【伊庭 功さん提供】



嘉数の丘に残る日本軍のトーチカ【伊庭 功さん提供】

【体験談—嘉数高地での戦闘—】

若杉 幸雄さん（守山市）

若杉（小島）幸雄さんは、第62師団独立歩兵第13大隊第1中隊に所属し、嘉数高地での戦闘に参加されました。その時の体験が『防人の詩 悲運の京都兵団証言録 沖縄編』に掲載されています。抜粋を紹介します。

自分たちの独立歩兵第13大隊が布陣した地域は首里の北方8キロほどのところで、周辺一帯は丘に近い緩やかな勾配の山稜がいくつも続く地域であった。そのなかで最も標高差の高いのが嘉数の大隊本部の布陣丘陵であった。高いといっても80メートルほどだったが、それでも西方にひろがる洋上を一望できる高さにあった。

やがて夜が明けた。砲撃が始まった。激しい砲撃が高地の傾斜面に集中してきた。自分たちのところは死角なのか、砲弾は飛来しなかった。

砲撃が止んだ。と、松林の向こうに戦車隊がみえた。戦車の後方と車側には歩兵部隊が続いていた。ゆっくりと近づいてきた戦車隊と歩兵部隊との距離が500メートルに縮まった。この距離では射弾は届くが命中殺傷率は低かった。いま少しの辛抱だ、と自分に言い聞かせた。軽機関銃のすぐ横には飯盒に水をいっぱい入れ、布ぎれがひたしてあった。銃身の焼けるのを防ぐためであった。

先頭戦車が200メートルの距離に迫った。自分は軽機関銃の銃口を随伴歩兵の隊列に照準するや連続して射弾をおくり始めた。隊列が激しく乱れるのがみえた。同時に戦車の砲身がゆっくりと自分たちの方に向けられた。山裾のくぼ地から突然に日本軍の射弾がおくられたことに驚いたのか、分隊の面々も

射撃をはじめた。米軍も応射に移り、彼我の銃火がほえ合う状況となった。後方にそびえる高地も銃火と砲煙に覆われ始めた。

持ち場死守の命令どおり、自分たちは山裾の陣内に終日へばりついていた。だが、夜の訪れとともに友軍の動静が気になった。そこで同じ高地の背面の大隊本部壕をのぞいた。そこには幾十人も負傷兵がうづくまり、異様なうめき声が壕壁を震わせていた。血臭の充満する壕内はまさに、地獄であった。

翌日 自分は軽機関銃を撃ち続けていたが、敵の迫撃砲弾が至近で炸裂した、と思った瞬間、その鋭利な破片が右腕のつけ根に突き刺さった。患部からの出血がぐっしょりと軍衣を濡らし始めた。右腕のつけ根のあたりがざくろを割ったように口を開け、止血の方法とてなかった。

（『防人の詩 悲運の京都兵団証言録 沖縄編』平成6年（1994年）、京都新聞社刊行より）



嘉数高地のトーチカ【沖縄県公文書館所蔵】



日本兵の戦闘

鉄かぶと、陸軍夏服・軍袴 以上各2

三八式騎兵銃、鉄製手榴弾

※これらの資料は沖縄戦で使用されたものではありません。



陶器製手榴弾

金属が欠乏していく中、陶器製の手榴弾や地雷が作られ、沖縄戦などで使用されました。

陶器製手榴弾は、信楽や瀬戸、有田などの焼き物の産地で作られた陶器の葉きょうに、埼玉県川越市の工場で火薬や雷管が取り付けられて、軍へ納められました。展示品は埼玉県の工場近くの河川から出土したものです。



陶器製地雷 基本展示で展示中です。



飯盒・水筒

前田高地の戦闘

前田高地は13世紀から15世紀頃の城跡（浦添グスク）に造られた陣地でした。標高120mほどの丘陵上からは、わずか4km先に司令部が置かれた首里城が見えます。

高地は北東側が切立った断崖となっており、その東端に為朝岩（ニードロック）があります。第62師団独立歩兵第12大隊や援軍の第24師団は、この頂上の争奪をめぐる、はしごを架けて断崖を攻め上った米軍と激しい白兵戦を展開しました。



前田高地の絶壁に掛けられたはしご〔沖縄県公文書館所蔵〕

【体験談—前田高地の自動車壕に籠って—】

Yさん（愛荘町）

4月1日、輜重隊のYさん達は普天間で上陸してくる米軍の大部隊を目にし、その日のうちに前田高地の陣地壕に撤退します。一息ついたのも束の間、そこは嘉数高地撤退後、日米両軍が激突する最前線となりました。そこでYさんは、米軍の戦車などに自爆攻撃を行う多くの日本兵を目撃されました。

わしら（輜重隊）は、自動車を隠さないかんさかいに、沖縄の人にも手伝ってもらって前田の山に造った自動車壕があつてん。その壕に米軍が馬乗り（地下壕のある丘陵上を米軍が占拠し、壕内に籠る日本兵に対して攻撃する状況）したんや。

ほんで、壕で小隊長と2人で10キロ爆雷を作ってたんや。白木の箱に5キロの黄色火薬を2つ入れ、その真ん中に手榴弾を入れるんや。壕の上を米兵が

占拠しとるさかい、昼は地下壕から出たら、10メートルも行かんうちにやられてしまう。それで日が暮れかけたら、壕から10キロ爆雷を兵隊が背負って戦車のとこに飛び込んで行きよんねん。「10キロ爆雷を放れ」といっても、重たいとなかなか遠くへ放れへんやろ。ほんで、負いねて(背負って)人間が飛び込む。飛び込む時に上に出とる手榴弾の信管に発火しといて、飛び込んで行かへる。これが「ブスブス」いって、「バカーッ」と爆発するんや。死ななあかん。わしらの壕だけやない。みなそうやった。

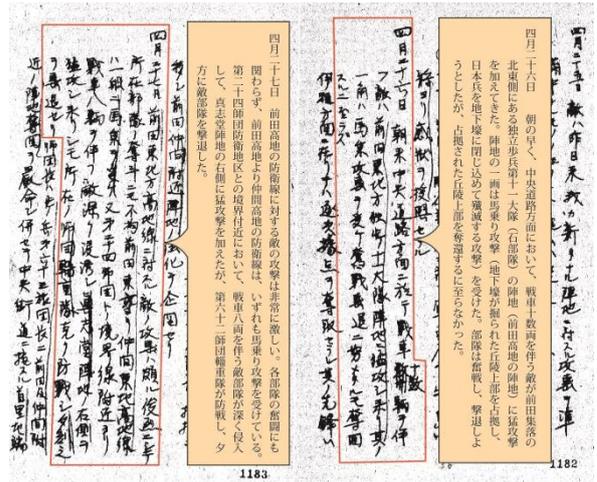
ある日、わしともう一人が中隊長の壕への伝令に行った時、米兵が見つけて、迫撃砲を「バーッ」といっぺんに50発ぐらい撃ちよったんや。ちょっと低いとこがあったからわしが伏せたらな、1メートルぐらい先にいたもう1人が…。一番近くで人が死んだのを見たのは、その時やった。

前田でも、叩かれ通して兵隊がようけ死によった。勝ち戦やったら戦死者も収容して火葬するとか、穴掘って埋めるとかできるんやけど、壕から1メートル出たら、上からボンと撃ちよるさかい、どうもしようもない。戦死しはってもどうこうすることもできへん。

ここで1月近く持ちこたえてたんやけど、「いよいよあかん」言うて転進や。前田から首里へ逃げたんや。夜に、やられもって(攻撃されながら)でも行った(撤退した)んよ。自動車隊でも自動車には乗れへん。エンジン掛けるやろ。ほたら、弾が飛んでくるねん。アメリカは電波探知機で、どこどこに、どんだけのもんが動いてるか分かるねん。



自動車壕【沖縄県公文書館所蔵】



前田高地での戦闘記録

(『沖縄作戦に於ける第六十二師団戦闘経過概要』より)

昭和22年3月25日 第三十二軍残務整理部作成(防衛研究所戦史研究センター所蔵)

第32軍首里司令部

第32軍司令部は、昭和19年(1944年)10月の沖縄大空襲の後、強固な地盤をもつ首里城地下に司令部壕を構築しました。

司令部壕は、複雑に枝分かれした全長千メートルを超えるコンクリート造りの坑道で、内部には執務室や作戦室、通信室などのほか、居室や浴室や食糧室もあり、千名以上の将兵を収容できました。

司令部壕は喜屋武半島の摩文仁への撤退の際、軍によって爆破されましたが、その一部(通信隊が使用した第5坑道の入口部分)が沖縄文化を代表する世界遺産「首里城跡」に残されています。



第32軍撤退後の首里司令部壕【沖縄県公文書館所蔵】

【体験談—第32軍司令部と南風原陸軍病院—】

木本 勇さん（大津市）

木本 勇さんは、滋賀県庁にお勤めされていた21歳の時に召集を受け、県庁に在籍のまま石部隊に配属されて中国に渡りました。沖縄上陸後は飛行場建設に携わった後、第32軍司令部副官部への出向を命じられました。

私は県庁にいたおかげで、独立歩兵第11大隊より第32軍司令部副官部へ配属されたんですよ。女性事務員もいる事務室は、軍隊のような厳しさは感じられず、まるで地方事務所のように毎日楽しく過ごせました。今ならコピーですけど、上官が「印刷してくれ。」といって持ってくる軍司令部から各部隊へ配る書類をガリ版書きして作っていたわけですが、それも長くは続きませんでした。戦闘状態となったため、4月28日には特別編成隊ができ、事務室は勿論無くなりました。

司令部壕が首里にあった時、我々兵隊は4か所あった壕の入口に監視のため、歩哨に立たされたんですよ。当時の首里城付近は竹藪でね、入口付近も全部竹藪でした。入口で歩哨に立っていると、たくさんの弾が撃ち込まれて、竹がバンバァーン、バンバァーンと、もう当たるか知らんと思うほど近くで音がしました。そのころには首里も完全に戦闘状態に入っていたという事なんですわ。飛行機は1トン爆弾を落としてね。首里城の山の下を削っている壕は天井などを丸太で造っていたので、なんと山が揺れましたね。「グァー」と。そして、土がバラバラと落ちてきました。

その頃に将校が撃たれてね。南風原の陸軍病院へ担架乗せて行ったんですが、移送中、攻撃を受けた10人ほどの兵士に遭遇しました。少尉が軍刀を支えにして小岩に腰掛けたまま腹部をえぐられた状態で死んでおり、そばには1人の兵士が短剣を振り回して「助けてくれ。」と叫んでいました。病院へ着いてそのことを看護婦に伝えましたが、「行けない。今はそれどころではない。」と言われ、私もそのことは百も承知で納得せざるを得ない状態と思ったものです。

それから間なしに米軍が来て、病院は解散になったんです。その時、全員に手榴弾が1個ずつ渡されたんですよ。我々も渡されました。「動けないもんは

自爆せい。」とってね。動けない重症患者は手榴弾による自爆、動ける患者は白衣のまま南下、傷付いている者は薬もなく、生きながらウジが湧き、まるで生き地獄でした。



手記『沖縄戦記』 木本 勇さんが綴った沖縄戦の手記



出征時の木本 勇さん（右端の人物）【木本 勇さん提供】

<p>（昭和20年）一月二十六日 曇天</p> <p>防衛部署の変更 一、球作命第九十八号（命令番号）を伝達する。第三十二軍は沖縄本島の防衛地区を一部変更する。第六十二師団所属の歩兵第六十四旅団を新防衛地域内に移動させ、その主陣地帯の画期的な強化を命じる。また、独立混成第四十四旅団を知念半島地域に移動させ、新防衛地域内の防衛の任務にあらせるとともに、第六十二師団がその地域で実施してきた作戦準備の継続を命じる。</p>	<p>（昭和20年）一月二十六日 曇天</p> <p>球作命第九十八号（命令番号）を伝達する。第三十二軍は沖縄本島の防衛地区を一部変更する。第六十二師団所属の歩兵第六十四旅団を新防衛地域内に移動させ、その主陣地帯の画期的な強化を命じる。また、独立混成第四十四旅団を知念半島地域に移動させ、新防衛地域内の防衛の任務にあらせるとともに、第六十二師団がその地域で実施してきた作戦準備の継続を命じる。</p>	<p>（昭和20年）一月二十六日 曇天</p> <p>球作命第九十八号（命令番号）を伝達する。第三十二軍は沖縄本島の防衛地区を一部変更する。第六十二師団所属の歩兵第六十四旅団を新防衛地域内に移動させ、その主陣地帯の画期的な強化を命じる。また、独立混成第四十四旅団を知念半島地域に移動させ、新防衛地域内の防衛の任務にあらせるとともに、第六十二師団がその地域で実施してきた作戦準備の継続を命じる。</p>	<p>（昭和20年）一月二十六日 曇天</p> <p>球作命第九十八号（命令番号）を伝達する。第三十二軍は沖縄本島の防衛地区を一部変更する。第六十二師団所属の歩兵第六十四旅団を新防衛地域内に移動させ、その主陣地帯の画期的な強化を命じる。また、独立混成第四十四旅団を知念半島地域に移動させ、新防衛地域内の防衛の任務にあらせるとともに、第六十二師団がその地域で実施してきた作戦準備の継続を命じる。</p>
--	--	--	--

『第三十二軍陣中日誌（案）』

この書類は、木本 勇さんが配属になった第三十二軍副官部が作成した司令部の業務日誌です。各部隊に配る文書の印刷だけでなく、司令部から発令された命令文や将官達の出張、司

司令部へ転勤・異動など、その日の司令部で行われた業務記録をまとめることも木本さん達の仕事でした。

『第三十二軍陣中日誌(案) 昭和19年3月27日～昭和20年1月31日』、第32軍参謀部作成(防衛研究所戦史研究センター所蔵)

首里で戦死した小西源二さん(東近江市)

小西源二さんは、蒲生郡平田村大字上羽田(現在の東近江市上羽田町)から京都に働きに出られ、昭和18年(1943年)8月4日に妻子を京都に残して出征されました。

小西源二さんの沖縄戦の経過は、昭和20年(1945年)4月17日に那覇市首里で戦死されたこと以外、分かっていません。



小西源二さん関係資料

上: 祝辞(高野泉町内会)

下: 徴兵保険証券、扇子

扇子の表面に「万歳」、裏面に「愛国行進曲」と揮うされたもの。

南風原陸軍病院壕

那覇にあった第32軍の沖縄陸軍病院は、戦況悪化により南風原陸軍病院壕へ移転しました。昭和20年(1945年)5月には、壕の収容限界を超え、うめき声と異臭が充満する蒸し風呂のような壕内で、一晚に70～100人も外科手術が行われました。ひめゆり学徒隊(県立第一高等女学校女子学徒)は、日を追うごとに増加する負傷兵の治療補助や、傷口のウジとり、患者の糞尿の始末、死体の片づけなどに追われました。

病院の撤退時には、数多く重症患者が青酸カリや

手榴弾を渡されて置き去りにされました。

この壕でのひめゆり学徒隊の姿は映画「ひめゆりの塔」にも描かれています。



兵士達が潜伏した摩文仁の海岸壁【伊庭 功さん提供】



南風原陸軍病院壕跡【伊庭 功さん提供】

【体験談—摩文仁への撤退—】

木本 勇さん(大津市)

木本 勇さんは、5月22日の第32軍司令部の摩文仁への撤退決定を受けて、部隊の4人の仲間とともに、摩文仁へ向けて出発します。

「司令部は首里城から摩文仁へ撤退せい。」て命令が出たんですよ。最初の頃はまだ石部隊と司令部の音信ができたんです。「原隊復帰せい。」と通知を受けたその日か、次の日に「部隊は牧港で全滅したから、復帰しなくてよい。」て言われたんですよ。私の部隊は、敵上陸を迎え撃つために、牧港で壕に入っていたんです。火炎放射器で全員がやられたらしく、おおかた全員が戦死ですわ。

落伍者があったから遅れて3日後に、私が摩文仁へ着いた時には、もう軍は解散状態になっていまし

た。どこに誰がいるのやら、ばらばらでした。誰が上官やら、軍司令部がどこ行ったやら。もう、誰もが気力は既にありませんでした。日本が勝つとか、抵抗するとか、そういう状態やないですわ。誰もが我が身かわいさで、必死に撤退していたんですよ。

摩文仁では海岸の大きい岩間に隠れていたんです。摩文仁には真水がでる井戸は私の壕からは100メートルぐらいのところにある1ヶ所だけでした。井戸の周りは死人でいっぱいでした。そこで水を汲んで、死んだ兵士が持っていた雑囊の中をあさり、乾パンなどを取って食べました。その帰り、米兵に見つかったんです。岩間に隠れたんですが、ババーンと、しつこく撃ち込んできて、さらに隠れようとしたら、深さ5メートル位の穴に落ちた所へガソリンの入った携行缶をボーンと放り込んで曳光弾でそれを撃ち、発火させたんです。バァーと火が燃えてる中、それこそ死に物狂いにはい上がり、仲間に背中やらの火を消してもらったんです。もう少しで焼死するところでした。

銃は持っていましたが、撃てる状態やないですわ。完全に包囲されていたから、そんなもん弾1発でも撃ったら集中攻撃に遭いましたね。

兵士達の終戦

日本軍の組織的な戦闘は、第62師団の諸隊が喜屋武半島南端の各所で壊滅していく中、昭和20年(1945年)6月23日に第32軍の牛島司令長官達が停戦命令を出さないまま自決したことで終結します。そうした状況下、兵士達は「自らの終戦」について、決断を迫られました。

ある者は、分隊長として敵の砲火の中へ最期の突撃を敢行し、ある者は自らの手で命を絶ち、またある者は壕に潜伏した後、米軍に投降して捕虜となりました。兵士達の終戦のかたちを体験談や手記から見ていきます。



第32軍牛島司令長官・長参謀長の埋葬地

〔沖縄県公文書館所蔵〕

【体験談—七里分隊長の最期—】

七里 操さん(長浜市)
国鉄職員の七里 操さんは召集され、第62師団通信隊の兵士として沖縄に赴きました。沖縄出身の元少年兵 佐敷興勇さんが書き残した手記『七里分隊の沖縄戦』から当時、23歳だった七里操分隊長の戦場での姿を見ていきます。

七里伍長は四年兵、やや小柄ながら、ひげが濃く、通信兵としては、歩兵のように精悍な顔つきをしていて、厳格で怖い人に見えてビビったが、逆に部下思いの非常に優しい、親切な上官だった。

6月20日、歩兵第64旅団本部壕の壊滅が間近に迫った時、七里分隊は師団への復帰命令を受け、敵の機関銃が壕出入口の頭上から狙う中、壕からの脱出をはかります。

日が暮れると、全員が出入口の近くに集結した。七里分隊長が静かな声ではあるが、これまでとは違う厳しく真剣な口調で、これからの心構えと注意すべきことを簡潔だが要領よく伝えた。

腰をかかめ背を低くして、真先に分隊長がそいつと出ていった。かなりの時間がかかったものの、その間、照明弾も上がらず、全員無事脱出に成功である。摩文仁岳を目指す。

6月22日、七里分隊は摩文仁の第62師団通信隊壕で最期の時を迎えます。

翌朝、七里分隊長と上等兵が通信機を壕の外へ持ち出して破壊した。二人とも綺麗にひげを剃ってある。いよいよ最後の時が来たことが感じ取れた。や

がて夜が明けわたると、「戦車発見」という大声が響きわたった。岩の隙間から北の方角を除くと、続々と戦車が轟音を立ててやってくる。いつの間にか、二十台前後のM4戦車が砲口を向けて横一列に並んでいた。戦車砲の一斉射撃が始まる。大音響とともに彼方此方の岩が弾け飛ぶ。「無線分隊、戦闘配置につけ」の命令がとび、七里分隊長が二等兵3人の銃をとり、一丁ずつ改めて弾込めを確認して、夫々に、しっかりと返すと、真先に壕の外に飛び出す。

七里さんの最期の様子は、ページが欠落しているため、『手記』では追えません。佐敷さんが七里さんのご遺族に語られた話では、「沖縄県出身の佐敷さんら3人の少年兵に「お前ら若い、戦争で死ぬな。」と伝えて、死体をかぶせて少年兵達を隠した後、自らは手榴弾を抱え、敵に向かって壕から飛び出し、爆弾で散っていった。」とのことでした。

(『第六十二師団(石)師団通信隊 第三五九九部隊無線中隊 七里分隊の沖縄戦』佐敷興勇、2001年3月より抜粋。)

【体験談—司令長官らの自決とその後—】

木俣 福一さん・初子さん(近江八幡市)

木俣(善住)福一さんは第62師団独立歩兵22大隊の曹長・准尉として沖縄へ従軍しました。各地を転戦した後、6月23日には第32軍の牛島司令長官・長参謀長の自決に立ち会われ、洞窟での潜伏生活や捕虜収容所を経験された後、昭和21年(1946年)1月に復員されました。生前に書かれた手記や夫人の木俣初子さんのお話からその体験を追ってみましょう。

元善住准尉(木俣福一さん)の手記『沖縄戦従軍記』の抜粋・要約

六月二十三日 刀折れ力尽きて、軍司令長官牛島中将、参謀総長長中将両閣下相次いで自決され、それぞれに続く者ぞ数しらず。

此の時長参謀長より詩を受け、善住准尉は五人の部下と共に待還の指揮をせよと云われて、死にたくても死ぬことも出来ず、五人の兵士と共に半年の洞窟生活。十二月の末、出て来る時は、唯二人。外は栄養失調で倒れた。集容所の人達と共に本土に一月初旬に帰り 一後略一

平成7年(1995年)頃、木俣(善住)福一さんと戦友の滝下さんがご夫人を伴って、長期間に渡って潜伏していた沖縄県糸満市摩文仁の洞窟を訪れた時の話です。

(軍司令長官らの自決後に)主人達が潜伏していた洞窟は、洞窟といっても太良坊さんのような、岩と岩が寄っただけのものでした。「こんな頼りない洞窟に入っていたの?」と思いました。主人が10センチほど積もった松葉をどけると靴の底が出てきました。腐って底だけとなった革靴がそのあたり一面にたくさん散らばっていました。兵隊さん達の革靴が…。

洞窟内で主人は、「お〜い滝下君、わしらが使ってた火鉢があるかな。」と、当時使っていた火鉢を見つけました。それは、「沖縄のよその家から取ってきた火鉢で、火種をどけては煮炊きしてた。」らしく、夜には「敵が射撃に来よるさかいに、(明かりが漏れないよう)岩の窪地に火鉢を隠し入れた。」ものとのことでした。

戦後、主人が近江八幡の市民病院で摘出してもらった弾は、ここで仲間と隠れていた時に、主人が一番奥にいたそうですが、足にもらった焼夷弾だったそうです。

主人はおおらかというか。陽気な人でしたから、ここでの生活を「間があったら、向こう(米軍)の寄宿舍へ物取りに行つては、ほれ食べて生き残つた。米軍の方へ、盗人に歩いてたのや。」と笑ってましたが…。

〔夫人の木俣 初子さん〕

【体験談—終戦の夜の花火のような曳光弾—】

Yさん(愛荘町)

前田高地から撤退し、首里の防衛にあたっていたYさん達の輜重隊は、第32軍司令部の摩文仁への撤退を受けて、5月26日に山城の壕(糸満市山城)への転進を命じられます。その日から終戦の夜までのYさん達の体験を見ていきます。

5月26日に主力部隊は首里から山城の壕へ転進や。途中に、山を占領した敵の攻撃を受けて、30人ほどいた小隊の大半が一晩でやられてしまったんや。青天井の蝸壺(一人用の塹壕)に隠れてたんやけど、上から見たらようわかるわな。小隊はわしら3人だ

け残して全滅や。敵の中にいるから、わしらも逃げなあかん。日が暮れて、わしが1番に出ることになったんや。夜、敵が照明弾を絶え間なく打ち上げるから昼みたいやった。けど、撃ちよらなんだ。(攻撃してこなかった。)人のことはかまってられへんから、一人でどどん行ったら、友軍がいたんや。4~5日はその部隊といっしょにいてたけど、まあ行けるやろ思て、1人で山城へ行ったんや。そやけど、夜間の道は賑やかなもんや。目的地が最南端やから、進む方向はみないっしょになってしまうんや。もう行くところないから。歩けん人は言うて下がり(撤退すること)はった。かわいそうやけど、手かされへんかった。助けてたら、自分が動けへんからな。

6月23日に摩文仁の壕の軍司令官やらの偉いさんが「戦うもんは戦え。」て言って自決しなはったんや。親方がないで、あとは修羅場やな。ほんで、しばらく山城の壕にいたんやけど、食べるもんもないし、「死ぬのやったら、同じとこで死のまいか。」ちゅうて、仲間がようけ戦死しはった自分らの前田陣地へ行こうとなって、13人の仲間で毎晩歩いて1週間かかって行ったんやわ。

米軍は毎晩、何にもしよらへんのにな、その4日目の晩に沖縄本島におけるアメリカの部隊全部からな、空に向けて曳光弾を撃ちよってん。そら、美しかったな。愛知川の花火よりも美しかったん。その時は、「えらい今夜は変わつとんな。」て言うてたんや。で、後から聞いたらそれが終戦の勝ちどきやった。

捕虜収容所

米軍は、住民のための収容所とは別に、投降した日本兵を収容する7ヶ所の捕虜収容所と捕虜専用病院を沖縄本島に設けました。昭和21年(1946年)4月末時点で収容者数は12,691人でした。

兵士達は、本土・沖縄・朝鮮半島などの出身地別や将校・兵士などの階級別のグループで収容・管理され、荷役作業や基地建設、清掃作業などが課されました。収容所では、野球や相撲大会などのスポーツ大会や演芸会などのレクリエーションも頻繁に開催されました。



小樽捕虜収容所の日本兵捕虜【沖縄県公文書館所蔵】



地下壕に日本兵が潜伏していないかを調べる米軍兵士【沖縄県公文書館所蔵】

【体験談—米軍捕虜収容所—】

Yさん(愛荘町)・木本 勇さん(大津市)
玉音放送が流れた8月15日以降も、沖縄の一部の日本兵達は終戦を知らずに、身を隠していました。前田高地の地下壕にいたYさんもその一人でした。

前田陣地へ着いて、しばらくの間、壕で暮らしてたんや。終戦やて知らんさかい。終戦になったことは、ビラで知ったんや。アメリカ兵は(Yさんたちの投降を促し、壕の外へ)「出てこい。出てこい。」て、毎日来よる。けど、出て行かんわな。ほんで、9月に入ったら、(アメリカ軍兵士が)「いっぺん、(外の様子を)見に来い。」て言いよんねん。小隊長が見に行かはった。ほたら、「もう戦争が終わった。負けた。」て分かるわな。

9月23日朝、敵のトラックに乗せてもうて向こう(捕虜収容所)へ行ったんや。トラックに乗るまでの間、山の上(前田高地)をずっと歩いてた。石こ

ろをころがしたように、白骨がどんとあったわ。みんなうちの部隊や。手を合わしただけで、何もできなかったんやけど…。

捕虜収容所は、浦添市牧港の海岸より少し奥まったところの、村より大きいぐらいの収容所やったな。その夜、初めてゆっくり寝れた。やれやれ思て、毛布の上でぐっすり寝たんや。安堵感やな。

収容所での作業は、道路を修理してるアメリカ工兵隊へ自動車で、昼飯を配達する仕事やった。炊事係が作った昼飯を乗せてよ、運転して行くんや。毎日、昼だけ1回行ったらええねん。そこ行くと、アメリカ兵が「わしもいっしょに食べや。」て、昼飯をよう食べさせてくれた。昼飯配りがない日は、トラックで道路掃除に行ったんや。〔Yさん〕

**摩文仁の壕に潜伏していた木本 勇さんにも決断の
時が迫ります。**

仲間が摩文仁の壕の中で自爆して、私も左大腿部に手榴弾の破片を幾つも受けたんですよ。瀕死の重傷でした。当時、私たちは捕虜になれば処刑されるもんやと思っていたんですが、いずれにせよ、私は出血で死に至るは必至でした。その日やったかな、はっきりと記憶がないんやけど、白旗あげて捕虜になりました。昭和20年8月26日で、捕虜2,600人目との事でした。

捕虜収容所では、米軍の医師の手当てにより傷も癒えました。作業に行っても絶えず米兵の看守3名が付いていましたが、親切で決して酷使はされませんでした。〔木本 勇さん〕

沖縄方面への特攻作戦

特攻作戦とは、兵士が死ぬことを前提とした攻撃作戦です。沖縄戦では航空機による敵艦船への体当たり（航空特攻）や、戦艦大和などの海上特攻、米軍飛行場への空挺隊による強行着陸と奇襲攻撃（空挺特攻）などの特攻が行われましたが、多くは攻撃対象に到達することなく撃墜・撃沈されました。

航空特攻では、米軍艦隊が接近した昭和20年（1945年）3月中旬から終戦まで、主に空母や輸送艦への特攻が行われ、陸軍と海軍合わせて2,989人の航空特攻隊員が戦死しました。

空挺特攻では、義烈空挺隊が米軍占領下の北飛行

場へ強行着陸し、飛行機26機の破壊と備蓄ガソリンの焼却に成功しましたが、全隊員88人が戦死しました。



米軍読谷飛行場（北飛行場）に強行着陸した空挺特攻機
〔沖縄県公文書館所蔵〕

【海軍時代の吉田信太郎さん】

—三重航空隊に入隊—

吉田信太郎さんは海軍飛行専修予備学生として、三重海軍航空隊に配属されました。三重空には吉田さんと同じ師範学校第二部の同級生、小林進さんも配属されていました。その後、島根県美保航空隊へ転属して飛行訓練を受け、茨城県百里原航空隊、さらに愛知県明治航空隊にかかります。

—士官として帰郷—

「家に帰ったのが（20日午前）8時で、母は非常に驚きました。後、父の所に行き、学校へ行って森本と出遭ひ色々話合った。彼、相変ずの張切りだ。八日市の町も淋しくなった。変わらないのは田舎だ。非常に懐かしい。5時に家を立つ。父、駅まで送って戴く。有り難かった」〔日記 昭和19.9.21〕

「昭和19年秋であったと思うが、吉田君は真っ白の海軍士官の制服に短剣といった凛々しい姿で帰郷し、中野国民学校に勤める私を訪ねてくれた。これが彼との最後の出会いであった」

〔中学～師範の同級生：森本実さん〕

（『滋賀県立八日市中学校第十七回卒 記念文集』（昭和61年刊）より）

—特別攻撃隊として出撃—

20年3月、出撃命令が出て、鹿児島県串良航空基地へ移動しました。4月6日、アメリカ軍の沖縄侵攻

を阻止する菊水一号作戦の一環で串良航空基地を出撃することになりました。この直前、同僚の隊員を追って串良に着陸した同級生の小林進さんと偶然に出会います。吉田さんは小林さんに「俺はちょっと先に行くよ。あとをよろしく」といい残して出撃していきました。

「四月六日 いよいよ俺の命日だ。第一天櫻隊第二番機として出撃する予定なり。死も生も古今の限りであるが、皇国前途のため、生も考えず遙然として出る。…」

沖縄の敵空母と体当たりを敢行する迄の武運を祈るのみ。どうか御両親様、御身体に充分御注意下さい。私の逝った後は、私の事なんか考えず、安楽に気を大きくして御生活下さい。妹達もそれぞれ賢くなるよう勉強し、自分で何事もやり、立派な人となって頂きたいと思う。いつも妹達の事を思って寝られなかったこともある。今は笑って貴女達の育って行くのを見守って居ります。弟達はそれぞれ皇国の為、遅かれ御奉公することだらう。家を継ぐものは誰でもよいが、祖先に報ゆる様御尽力下さい。弟達とは少しも連絡が取れなかったが、戦死するまで常に立派になることを祈って居たと伝えて下さい。親類のみなさんにもよろしく。村の方々にもどうぞよろしく。云いたいこと山の如くあります。が、笑って死んでいくものには何も要りません。空母目がけて体当たりする、実に幸福だ。天櫻の如く皇国の為散ります。さようなら」【手帖「随想」より】



操縦席の吉田信太郎さん〔吉田亀治郎さん提供〕



吉田信太郎さんたちに関する展示

吉田信太郎さん関係資料

軍帽（海軍）・軍服（海軍） 夏用の軍服（第二種軍装）

手帖「随想」 吉田信太郎さんが出撃当日に書き残したもの
海軍大尉任命書 戦死後に海軍大尉に昇進した際の任命書

【体験談—沖縄への特攻を前に終戦—】

Fさん（東近江市）

Fさんは昭和20年に敦賀36部隊へ入隊し、5月に沖縄特攻師団に配属され、沖縄特攻の命令を受けました。迫撃砲兵として熊本県八代市に駐屯待機中に終戦を迎えられました。

日本原実弾演習場で訓練を受けていた時に、「沖縄の牛島師団を助けよ。特攻師団として逆上陸せよ！」ということで、動員が下ったんや。命令なんで、沖縄を助けるために死にに行くつもりやった。せやけど、その頃はもう沖縄は陥落してたんと違うかなあ。

部隊は、主に滋賀県、福井、京都など、関西出身のものばっかりの部隊やった。独身が8割ぐらいやったけど、家族がいる40歳前後の人もおった。「俺は死んでもかまへんのや。家には弟がおるさかいに、やるだけやるんや。」と思ってたけど、奥さんがいる人なんかは、「どうしよう、君は一人もんやからええなあ。」て言うてね、泣いてはる人もおった。

部隊は熊本県八代に行ったけど、なかなか出撃命令が下れへんかったんや。終戦まで2ヵ月くらいやったんと違うかなあ。その間は、そらあ、不安やった。いつ命令が下るかかわかれへんやろ。前に行った船（先行して出撃した船）は、潜水艦にバンバンバ

ンと撃たれて、すぐに東シナ海で沈没や。乗る船はあっても、もう守ってくれる海軍の船はあらへんがな。敵の潜水艦がウヨウヨしてるし。もうあかんという事は、分かったたんやろけどな。

待機してる間に、玉音放送があったんや。ほんで、助かったんや。「やれやれ」やった。「これでもう死なんでええ。」と思った。



Fさん関係資料 水筒、千人針、革かばん (図説)

【陸軍時代の宇野栄一さん】

—知覧で訓練—

宇野栄一さんは、昭和18年8月5日第一次身体検査、9月13日に第二次身体検査を受け、陸軍特別操縦見習士官に採用されると、九州の太刀洗陸軍飛行学校知覧教育隊に配属されました。『在隊証明』は10月5日付けですが、9月末の卒業式の前に出発したようです。同級生たちが寄せ書きした『日の丸』に、陸海軍に志願した級友の名が見えないのはこのためでしょう。同級生の南井福治郎さんから碓本守さんあての葉書(昭和18.10.19)などによると、知覧教育隊には宇野さん、南井さん、中川原さんら5人の同級生が配属されていました。入隊直後に、一人っ子だった宇野さんは両親を心配させまいとする手紙を送っています。

「御安心下さい。お父さんも、お母さんも元気でせうね。室員の友達も中々面白い親切な人ばかりだ。いらぬ心配は無用だ。一人息子も五、六人ゐる。此の月中には写真も送る。隊長殿も教官殿も親切な良い人ばかりで、ほがらかである。航空隊はほがらかで明るい」

【昭和18.10】

—少尉昇任—

11月、奉職予定校が天津中央国民学校、在学中の銃剣道が一級だったことが手紙で知らされました。

19年6月、宇野さんは満州から帰国し、10月には少尉に昇任します。士官には基地外での下宿が認め

られており、下宿の住所を翌年1月に書き送っています。

「栄一は六月に満洲からかへって、あれからずーっと教官をしてゐます。この十月には少尉に任官する予定です。・・・外地に出ると云っても、戦争に行くのでなく、外地でもやはり今と同じく教官として生徒を教へるのです。自分の考へる所では、ここ一年間位はまだ戦地に出ないと思ひます」

【昭和19.7】

—大久保先生との再会—

20年2月、宇野さんは千葉県下志津飛行部隊銚子分屯地に移動し、近くの青年学校に赴任していた師範学校の恩師大久保先生と出会い、親しく手紙をかかずようになりました。先生が送った手紙によると、宇野さんは先生に結婚の相談をしていたことがうかがえます。

3月には特別攻撃隊(誠第38隊)に編成され、群馬県前橋飛行場で訓練を行いました。ここでは、一時の保養のため隊員たちと伊香保温泉にいったことが、当地の旅館に残された寄せ書きからわかります。また、飛行場のあった堤ヶ岡では、F子さんという女性と短期間ながら親しい接触があったことが、宇野さん没後に父親宇野京太郎さんに送られた手紙からうかがえます。

—特別攻撃隊として出撃—

宇野さんが特別攻撃隊に編成されたことを知った大久保先生は、宇野さんの次の移動先である宮崎県新田原飛行場へ会いに行くよう、宇野さんのご両親に手紙を送りました。父親京太郎さんは、先生をたよって千葉へ行き、そこで公務旅行証明を得て新田原へ向ったようで、そこで出撃前に面会することができました。

宇野さんは4月6日に新田原からいったん出撃しましたが、飛行機の故障で帰還。16日に改めて知覧から出撃し、沖縄西方洋上で戦死されました。



宇野栄一さん [宇野博己さん提供]



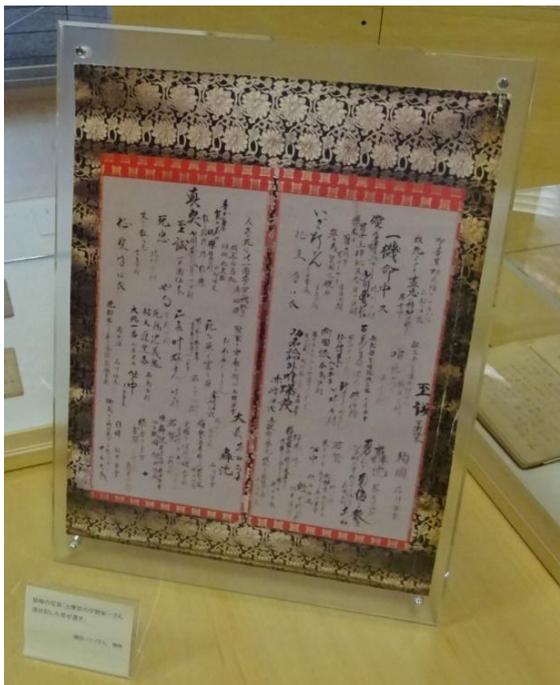
宇野栄一さん関係資料

上左：胸章（航空胸章）、上右：胸章（空中勤務者章）

下左から陸軍特別操縦見習士官ノ徴兵ニ関スル調査ノ件、

陸軍特別操縦見習士官第二次検査施行ノ件達、

陸軍特別操縦見習士官志願者第一次身体検査施行ノ件達



掛軸の写真 出撃前の宇野栄一さん達が記した寄せ書き

戦禍に巻き込まれた沖縄県の住民

第32軍は兵力不足を補うため、沖縄県の住民を対象とした召集・動員を行いました。法律で決められた召集年齢（男子17歳～45歳）を超えて、13歳～60歳までの男子約2万2千人を「防衛隊」として召集したほか、師範学校や旧制中等学校の男子生徒1,418人を「鉄血勤皇隊」や「通信隊」、高等女学校

の女学生505人を看護要員（「ひめゆり学徒隊」など）として動員しました。これ以外にも、各部隊が独自に動員した「義勇隊」や「救護班、炊事班」があります。召集・動員された沖縄県民の総数は、現在も明らかになっていません。

米軍は、陸・海・空から「鉄の暴風」と形容された砲弾・爆弾の雨を戦場に降らせました。戦場となった喜屋武半島での6月の米軍の弾丸・砲弾使用量は680万発に及びます。これは兵士・住民一人あたり、50発の弾丸・砲弾が使われた計算になります。そうした悲惨な状況下において一部の日本軍兵士が、壕からの住民追い出しや住民からの食糧強奪、スパイ疑惑での殺害、投降する住民の殺害、強制集団死の強要を行ったことが知られています。

米軍は、安全確保と基地建設のため、占領地域の住民を住民収容所に隔離しました。9月には沖縄県の全住民が自分たちの土地を奪われて、収容所で米軍の管理下に置かれました。



上：沖縄住民収容所

左下：住民収容所へ向かう沖縄住民達

右下：避難する沖縄住民【いずれも沖縄県公文書館所蔵】



捕虜となった少年兵【沖縄県公文書館所蔵】

【体験談—兵士達が見た沖縄県住民の姿—】

木本 勇さん（大津市）・Yさん（愛荘町）

木本 勇さんが首里から摩文仁への撤退中に見た沖縄の人々の姿です。

摩文仁へ向かう道路は、多く兵士、住民、白衣の看護婦等が彼方、此方に亡くなっており、体も散乱してそれはすさまじいものでした。夜中に道を歩いてつまずくと死人であったことが何度かありました。

隠れられる壕のような場所は、兵士達がほとんど占拠して、住民等が入っていれば追い出す。何回となくその様な状況を見ました。その中で住民も弾の降る中、諦めからか頭に荷物を載せて平然と道路を移動していました。

途中で寄った民家では、同じ年くらいの若い娘さんが、沖縄のお菓子の黒糖とね、トマトやったかな。呼んでくれはった（食べさせてくれたんです）。「食べて下さい。」言うてね。娘さんと部隊の3人で食べましたわ。そこで、「あんた、何処も行かへんの」て聞いたんですよ。「もう、いいですよ。行った所で死ぬのだから。」覚悟決めてはりましたわ。

〔木本 勇さん〕

Yさん達が撤退した喜屋武半島の山城では、米軍の攻撃から身を守るため、兵士や住民達が壕や自然壕（ガマ）に籠っていました。

山城では砲弾が飛んでくるので、沖縄の女子学生も男子学生も行くところないやん。自分らが勤労奉仕で壕を掘りに来てた兵士が籠る壕へ入れてもうてな。ご飯のこしらえやとかできることを手伝ってくれはったんやわ。沖縄の人には、軍人も世話になったん

や。沖縄の人も、壕の中に入れてもうて命拾いした人やら、あかんで死んでしもた人やら、いはったんや。
〔Yさん〕



走り去る米軍兵士と途方にくれる沖縄県の住民

〔沖縄県公文書館所蔵〕

【体験談—13歳の少年通信兵—】

佐敷 興勇さん（沖縄県）

沖縄県立第二中学校（現在の県立那覇高校）2年生（当時13歳）だった佐敷 興勇さんは、半強制的に通信隊の適正検査を受けさせられ、第62師団通信隊へ入隊しました。佐敷さんの手記『七里分隊の沖縄戦』から、少年兵佐敷興勇さんの体験を見ていきます。

配属先の津嘉山司令部壕での通信業務は、交代制で、通信士とデンプ回し、その他の雑役で、常時三・四人が任務についていて、他の者は、壕の外に出ることもなく、飯を食って寝るだけの生活になった。やがて時間の感覚も薄くなり、昼夜の区別さえ分からなくなってしまった。

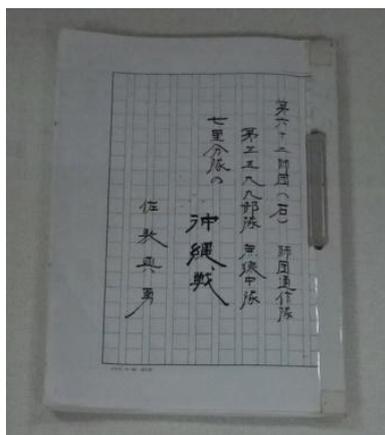
昼夜もなく、任務につかされた佐敷さん達の七里分隊は、戦況悪化により津嘉山から歩兵第64旅団司令部が移った喜屋武村福地の壕へ移動しました。そこで、全滅へのカウントダウンを告げる振動音を聞きます。

やがて、敵の砲撃が少なくなったと思ったら、壕のある丘の頂上が、敵に占領されたことを知らされた。暗くなって壕の入口に出ると、丘の上から機銃掃射がそそがれるようになり、昼は頭上で腹にしみ

わたるような機関銃に似た連続音が聞こえてきた。削岩機の振動音だという。噂に聞いた馬乗り攻撃(壕の上から削岩機で穴をあけ、爆雷を埋め込み、爆破させて壕の中の敵を全滅させる作戦)である。壕内の全員が玉砕の覚悟を決めなくてはならなくなった。**旅団長より命令を受け、摩文仁の第62師団通信隊へ戻った佐敷さん達の七里分隊は、第62師団最後の戦闘に参加します。**

曹長が軍刀を抜いて、まさに、「突撃」の命令を発する直前だった。戦車の砲口から赤い液状の物体が飛び出して辺りに降りかかってきた。「ガソリンだ」、「火炎だ」と聞こえた途端、同じ砲口から炎が吹き出されて、アッという間に、一面の火の海になる。佐敷二等兵は、避難すべく背後に頭から飛び込んだ。それでも下に転げ落ちる前に上衣の背中にはすでに炎が燃え移っていた。

(『第六十二師団(石) 師団通信隊 第三五九九部隊 無線中隊 七里分隊の沖縄戦』佐敷興勇、2001年3月より抜粋。)



手記『第六十二師団(石) 師団通信隊 第三五九九部隊 無線中隊 七里分隊の沖縄戦』(佐敷興勇著、2001年3月)

佐敷興勇さんが生前、七里操さんのご遺族(姉の七里志ま乃さん)に渡された手記の写しです。

那覇市嘉数で戦死したSさん(栗東市)

大阪の百貨店に勤務されていたSさんは、昭和16年(1941年)に徴兵され、北支へ従軍した後、部隊とともに沖縄へ渡られました。昭和20年(1945年)4月4日に那覇市嘉数方面で戦死されました。なお、Sさんが戦死された場所は、嘉数高地(浦添市嘉数)ではありません。



Sさん関係資料

上段: 戦闘帽

下段左: ゲートル Sさんが陸軍で使用したもの

下段右: 革かばん(図囊)

作戦地図などを持ち運ぶためのもの

第3章 帰郷 家族のもとへ

帰郷 家族への知らせ

沖縄に向かわされた将兵の多くは戦死し、二度と本土の土を踏むことはありませんでした。生き残った者も捕虜収容所へ収容されていた状況のもと、兵士達の帰りを待つ家族は1年以上もその消息を知ることができませんでした。残された家族に届いた戦死の知らせや帰郷を果たした兵士との再会の様子を家族の体験談でみていきます。



【体験談—戦死の知らせ—】

Oさん(高島市)・Kさん(愛荘町)

Oさんの夫の忠一さんは国民学校卒業後、京都へ大工見習いとして行かれ、26歳でご結婚。昭和19年6月召集されて沖縄へ出征し、昭和20年に戦死されました。

主人(忠一さん)は私と結婚したんで、大工を辞めて、うちの農業をやらはったんどす。

正直なまじめな人でしたわ。京都にいたもんやから、何もかもおしやれな人でした。

召集令状がきたのは、長女が3歳で、長男が生まれてすぐのときでしたわ。主人が入隊した隊は琉球の“球”と文字がついた『球部隊』(独立混成第44旅団)という名前でした。

けんどもその時は、私らにはそれがどういう意味かわからしません。後から沖縄から手紙がきて、わかったんやけんども、当時は沖縄が危ないという思いはなかったね。南方と違って、「沖縄やったら、まだ良いなあ。」と思ってました。ほんまは、球部隊というのはきつかったんどすえ。あの人が沖縄に上陸しはって、明るる年の2月にやられてますからね。

戦死しやはったことは、公報が来る前から「フツフツ」ともうあかんと感じてました。新聞で玉砕と書いてあったから。公報が来たときには覚悟はできてました。

【Oさん】

叔父(巳之助)は、昭和19年、30歳の時結婚して奥さんのお腹の中には娘さんが出来ていたのですが、3ヵ月くらいで召集令状が来ました。叔父は、中国へ派遣され、昭和20年に沖縄本島に移動したのです。

叔父の戦友の話では、塹壕で米軍と対決しているとき、叔父は爆弾で片足を失ったそうです。陣地が持ちこたえられなくなり、全員、突撃することになった時、多分、叔父は手榴弾で自決したのだろうという話でした。

【Kさん】



吉田徳太郎さん(右から2人目)とその家族(吉田福治郎さん、提供)

宇野栄一さん

左近清左衛門さん・とみさん(藤綾子さん、提供)



小西源二さんとその家族(小西富次さん、提供)

俊一さん(左側)

七里隼さん(七重伝夫さん、提供)

戦死した兵士達とその家族

【体験談—終戦2年後に来た戦死公報—】

Fさん(長浜市)

Fさんのお兄さんは、第62師団工兵隊に所属し、沖縄上陸後のしばらくの間、西原村幸地周辺の防衛陣地の構築に従事されました。首里などで戦闘に参加されたのち、6月22日に山城において23歳の若さで戦死されました。

3つ年上の兄貴(俊一さん)は昭和17年の12月10日に京都の福知山へ入隊して北支へ行って、北支から沖縄へ廻されたんや。沖縄は玉砕と聞いてたし、終戦後に2年間も消息がなかったんで、「まあ、あかんやろ、あかんやろ。」て思ってたわな。けど、実際どうなってるか分からんし。誰もみた者がいるわけやないから、分からんわな。

昭和22年6月15日に戦死公報が来たんや。長浜の御坊さん(長浜別院)で遺骨箱の引き渡しがあったんで、自転車で貰いに行ったんや。箱の中には何もなくて、沖縄本島、何とかで戦死と書いた紙が入ってただけやった。あの時分のことやから名誉の戦死で、ようけ戦死の連れがあったけど、子供手放して、わしら兄弟よりも、親はよっぽど悲しかったやろう思う。



兵事係から死亡通知書を受け取った家族

役場の兵事係が出征した兵士の死亡通知書を夫人・子供に手渡しに来ました。

展示品：国民帽、国民服上・下、図嚢

麻着物、もんぺ、子ども服(シャツ・ズボン)

【体験談—お前ほんまか、足あるか?—】

Z子さん（近江八幡市）

第32軍司令長官の自決に立ち会われたZ子さんの弟、木俣福一さんは、昭和21年（1946年）1月に復員されました。その時の様子をZ子さんの体験談で見てください。

当時、沖縄での玉砕の噂が伝わってきて、「福一はあかん、沖縄で戦死したに違いない。」とみんな言っていました。

昭和21年1月のある朝、福一さんから電話が掛かってきて、「今、安土の駅へもんだ（戻った）。」というので、おじいさん（義父）は「福一がもんで来たみたいや。」言うて、夫と走って行ったんです。したら、手榴弾で足を怪我して、痩せて、よれよれの軍服ひとつでしたが、やっぱり、福一さんが安土駅にいたんですわ。二人ともびっくりしやはったけど、喜ばはった。

後日、福一さんが（その時の様子を）いってました。「兄いが迎えに来てくれよったけど、もう、わしが幽霊やと思て、『お前ほんまけ。』言うて、足があるか見とった。『お前ほんまか。』ゆうて。」そういってました。

【体験談—夫の死亡通知書—】

左近 とみさん（東近江市）

私たちが結婚したのは、昭和12年、私が21歳のときです。主人の清左衛門は出征するまでは、茨川で学校の先生をしていました。

昭和13年、主人の所属する師団が北支へ出発することになりました。主人は「涙一滴こぼさぬよう元気に見送って欲しい。涙を見ると、隊へ戻ってからも思い出すから」というので、心で泣いても笑顔で見送りました。また、絶えず「自分も何時戦死するか分からない。戦死の報を聞いても、軍人の妻として、決して力を落としてはいけない。泣いてはならない。」と聞かされていました。

主人は昭和20年3月に北支から沖縄に渡りました。一度、ハガキが来て、後で、遺言状と遺髪・遺爪が送られてきました。

沖縄の激戦の様子は新聞などで知っていました。終戦になりましたが、主人は帰って来ませんでした。

気持ちの何処かに、「近いところやから、ひよっとして帰ってくるかも知れない。」との思いがありましたが、昭和22年2月に死亡告知書が役場から届きました。

兵事係の人が、夜、家にやって来て「びっくりせんといてや。」と言いました。私は戦死の知らせだろうと覚悟していたので、「どうぞ有りのまますを仰ってください。」と言いました。案の定「戦死です。」と言われました。死亡告知書には「昭和20年5月7日、沖縄本島首里方面ノ戦闘ニ於テ戦死」と書かれていました。でも、主人がどうして戦死したのかなど、当時の状況は何一つ分かっていません。私はまだ沖縄へ行っておりませんが、慰霊団の方にはいつもお酒とお水をこつづけています。



馬上の左近清左衛門さん【左近とみさん提供】



左近清左衛門さん関係資料

左から、遺言書（左近清左衛門さんが沖縄から家族のもとに送ったもの）、靖国神社社祀通知書、死亡告知書

【体験談—遺骨の代わりに木札—】

岩崎 三之利さん（京都市）

沖縄で戦死した兄の岩崎治三郎は、昭和17年の3月頃、まだ二十歳になってなかったけど軍属として海南諸島へ行かされました。

そこで二十歳になって現役召集の対象となり、兵

隊に行かんならんことになったんです。昭和17年12月10日、出征するため海南(諸)島から帰って来たんです。その時に海南諸島で手に入れたヤシの実で造った煙草入れを兄からもらったんです。兄の遺品はこれしかないんですわ。今から思ったらね、この先を兄貴が啜えたんだなど、懐かしく思うんです。

出征の日は仏滅でした。日が悪いので前日に、隣の親戚の家に泊めてもらおうと、9日に家を出たということにしよう、ということになり、隣の叔父さんの家に泊めてもらったんです。後日、その家の息子さんが手紙で教えてくれたんですが、兄が「もんたら(帰ったら)君をお嫁さんにくださいねえ(下さい)」と。じいさん(叔父さん)は、「おお貰ってやってくれ。そやけど、まだ小学生なつとこやで。」と、いわはつらしいですわ。兄も、帰ってくるつもりやつたと思いますわ。生きて帰ってきたら、「君をくださいねえ」ということは。

出征して兄は、中国の山西省へ行って、昭和19年の8月に中国から沖縄へ回されたんです。

8月15日に終戦になりましたでしょ。それまでに、沖縄があかんちゆうことは、薄々聞いてたんですわ。正式に言うてきたのは、昭和21年11月頃の夕暮れの5時頃でした。山上村(現在の東近江市山上町)の役場へ勤めていた近所の人が帰りがけに、「沖縄で戦死した」ということを言うて来てくれはつたんです。その時に母親が、「えらいご苦労さんです。」と言うて、すぐに仏壇にお線香を供えたのを覚えていますわ。夕暮れ、父が山から帰ってきて、線香のおいがしたので、母親に「やっぱりか。」といったのを覚えています。

その2ヶ月後に、白い箱で遺骨らしきものが返って来たけれど、中を開けてみたら、10センチぐらいの木の小札に、「岩崎治三郎之霊」と書いてあつただけですわ。遺骨があるはずないね。それが、遺骨の代わりです。戦争で死んだということで、村中が集まって、その箱で葬式してくれはつたんです。



左：ヤシ製煙草入れ

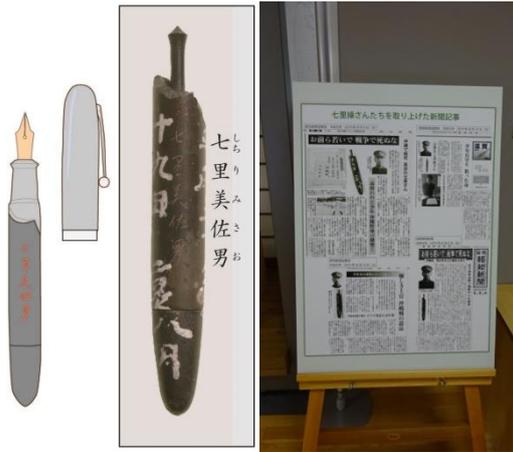
岩崎治三郎さんが海南諸島で手に入れたもの。

右：沖縄で戦死した兄(岩崎治三郎さん)と父親
【岩崎三之利さん提供】

長浜に帰った万年筆

平成24年(2012年)、滋賀県健康福祉政策課援護係に「万年筆の持ち主を探している。」との電話がありました。それは、長年に渡り沖縄で遺骨や遺品収集のボランティア活動をしている方が、平成20年(2008年)8月19日に摩文仁のガンマ(自然壕)の地下1mほどの土の中から多くの遺骨とともに掘り出した万年筆でした。

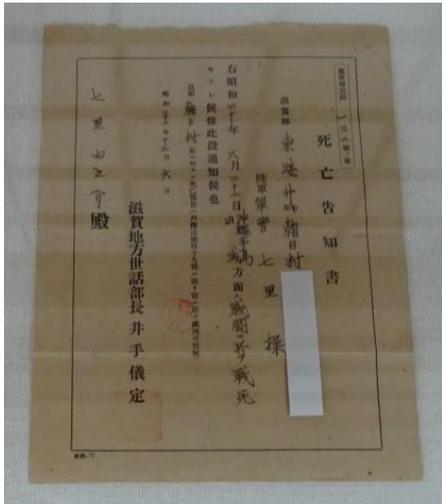
「七里美佐男」と刻まれた万年筆は、昭和20年(1945年)6月22日に、沖縄出身の少年兵達に「お前ら若い、戦争で死ぬな。」と言い残し、自らは手榴弾を抱えて敵に向かって壕から飛び出て死んでいった七里操さんの遺品でした。持ち主の捜索を行ったフリージャーナリストの方などの協力もあり、平成25年(2013年)1月22日に七里さんの万年筆は68年ぶりに故郷長浜の遺族のもとへ帰りました。



左：七里操さんの万年筆

摩文仁の自然壕から発見された万年筆。軸に「七里美佐男」と刻まれています。

右：七里操さんたちを取り上げた新聞記事



七里操さんの死亡告知書

昭和21年の戦死公報。誤った戦没地が記載されており、沖縄からの情報が得にくかった当時の状況を物語っています。

元少年兵 佐敷興勇さんの戦後

「お前ら若いで、戦争で死ぬな。」と言い残して七里操さんが戦死した翌日、佐敷興勇さんは自らの意思で戦線を離脱し、その後、米軍捕虜となります。ハワイの捕虜収容所で1年を過ごした後、帰島した佐敷さんは糸満高校へ復学し、勉強と野球に打ち込みました。

アメリカの統治下にあった沖縄の高校球児達は長い間、甲子園に出場できませんでした。昭和30年(1955年)、沖縄球児達の甲子園への夢を叶えるた

め、沖縄高校野球連盟が発足しました。沖縄工業高校の英語教師で、野球部監督となっていた佐敷さんは連盟の立ち上げメンバーの1人でした。佐敷さんが理事長となった昭和43年(1968年)には、沖縄県興南高校が甲子園で沖縄県初のベスト4入りし、人々に感動を与えました。佐敷さんの戦後の人生は、教育と高校野球を通じて沖縄の文化・スポーツの復興に貢献するものでした。

佐敷さんの戦後は、凄惨な戦争のなか、明日へ続く道があることを伝えて死んでいった七里操さんの想いを受けて始まったのかもしれませんが。佐敷さんは戦後20年以上、七里さんの最期の姿をご遺族に伝えるため、教え子達にも協力をしてもらいながら探し続けられ、姉の七里志ま乃さんと出会うことができました。ご遺族と佐敷さんの交流は、佐敷さんが亡くなられるまで続きました。



沖縄選抜高校野球大会決勝戦(那覇高校 対 那覇商業高校・昭和35年(1960年)) [沖縄県公文書館所蔵]



甲子園ベスト4進出の興南高校野球部を出迎える人々(昭和43年(1968年)8月) [沖縄県公文書館所蔵]



沖縄の高校球児たちの甲子園への夢をかなえるため、努力した佐敷興勇さんら高校教師たちの奮闘は、NHK放送『プロジェクトX 挑戦者たち』の番組「海のかなたの甲子園～熱血教師たち・涙の初勝利」（平成12年（2000年）7月4日放送）で取り上げられました。

現在、当時の映像は見る事ができませんが、NHK出版よりその内容が出版されていますので紹介します。

陸軍気象部の軍属として沖縄観測所へ

植田市造さん（東近江市）

植田市造さんは、豊椋村役場（豊椋村は今の東近江市）に勤めていました。3年勤めた豊椋村役場を昭和18（1943）年11月末に軍属志願のため退職しました。その後陸軍気象部の新田原観測所（宮崎県）に入り、そして沖縄観測所へ配属されました。

植田さんは、配属された沖縄観測所から母きささんへ次のような手紙を送っていました。「当地はまだまだ暖かくそちらの九月頃の気候です」。また同じ手紙には、徴兵検査に合格し来年の入隊に備えて身体を鍛えている旨の内容を綴っており、入隊を待ちわびているようすがうかがえます。この手紙が書かれたのは、昭和19（1944）年12月25日でした。

昭和20（1945）年3月、沖縄県に米軍が上陸し、激烈をきわめた地上戦がおこなわれました。植田市造さんは、昭和20年6月16日、沖縄本島南部の喜屋武（糸満市）方面で戦死しました。植田さんのご家族のもとに戦死の報せが届いたのは、植田さんが戦死したおよそ2年後の昭和22年5月10日でした。



植田市造さん関係資料

左：退職給与金裁定通知書（昭和19年2月19日付）

植田市造さんは、軍属志願を理由に3年間勤めていた豊椋村役場を昭和18年11月末に退職しました。

右：戦時死去ノ件 通知（昭和22年5月10日付）

植田市造さんが昭和20年6月19日、沖縄本島の喜屋武（糸満市）方面にて戦死した旨を報せています。

第4章 沖縄県の戦後 慰霊と継承



パナー写真：平和祈念堂から平和の礎と太平洋の青い海を臨む（公益財団法人沖縄県平和祈念財団提供）

遺骨収集

沖縄での遺骨収集は、沖縄住民が生活再建に伴い、地域に散乱する遺骨を拾い集めて「魂魄之塔」などの納骨塔に納めることから始まりました。

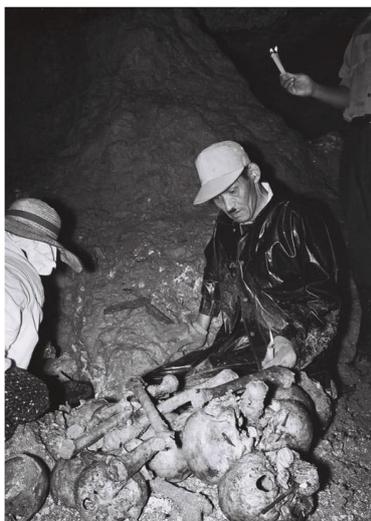
昭和31年（1956年）からは、日本政府の資金援助のもと琉球政府による大規模な遺骨収集事業が開始され、地下壕を含めて、収集活動が行われるようになりました。

平成 31 年（2019 年）3 月時点で 185,286 柱の遺骨が収集されて、国立沖縄戦没者墓苑に納められています。現在も厚生労働省の委託を受けた沖縄県のほか、民間ボランティアによる遺骨収集活動が続いており、新たな遺骨が発見され続けています。



魂魂之塔（福島栄寿さん提供）

『知っていますか？沖縄県に建つあなたの都道府県の慰霊塔と慰霊碑』（沖縄問題を考える懇談会発行、2019 年）掲載写真



糸満の壕内での遺骨収集（昭和 41 年（1966 年）8 月）

【沖縄県公文書館所蔵】

戦後の沖縄

沖縄の戦後の始まりは、日本国中に玉音放送が流れた昭和 20 年（1945 年）8 月 15 日ではありません。戦後は、地域が米軍に占領された時、人々が米軍の保護下に入った時から始まりました。米軍上陸地点の北谷町では地上戦開始日の 4 月 1 日には戦後となり、壕に籠って最後まで抵抗し続けた人にとっては、9 月以降も戦後ではなかったのです。

米軍は上陸直後から軍政を開始しました。昭和 21 年（1946 年）4 月には、住民による沖縄民政府・沖縄議会が発足しましたが、沖縄を統治する米軍が認めた範囲内での自治であり、議会も立法や予算決定に関わる権限を持たないものでした。

昭和 27 年（1952 年）、日本国はサンフランシスコ講和条約によって、連合国との戦争状態が終了し、国民の主権が回復しました。一方、沖縄を含む南西諸島は、米国の統治となり、日本国から切り離されました。4 月には司法・立法・行政の三権を司る琉球政府が発足しましたが、アメリカ太平洋方面軍の下部組織である米国民政府が琉球政府の決定を破棄する拒否権を持つなど、住民の主権は制限されていました。

沖縄の日本国への復帰（沖縄返還）は、沖縄住民と日本国民の努力の結果、昭和 47 年（1972 年）にようやく成し遂げられました。



祖国復帰要求大行進（昭和 39 年（1964 年）4 月・那覇）

【沖縄県公文書館所蔵】



小学校を視察する米国民政府の高等弁務官

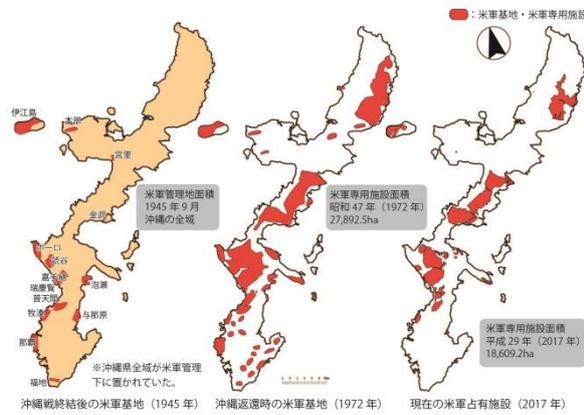
（昭和 33 年（1958 年）12 月）【沖縄県公文書館所蔵】

米軍基地

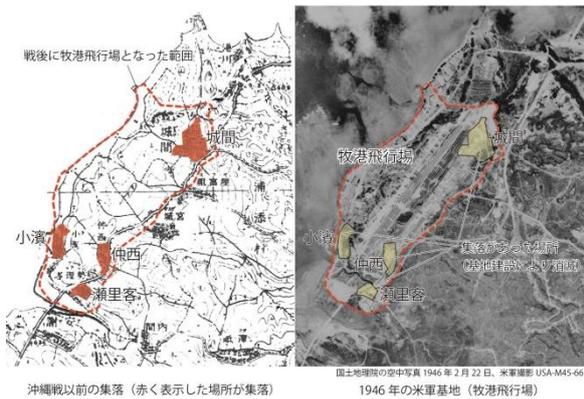
米軍の侵攻目的は、沖縄を日本本土上陸作戦の軍事拠点「日本に向けた最後の攻撃のための跳躍台」とすることでした。米軍は上陸後、いち早く日本軍の飛行場を占領・修理し、本土への爆撃基地とするとともに、住民を收容所に隔離し、集落や農地を基地へと変えていきました。

戦後、沖縄の基地は米軍統治のもと、朝鮮戦争やベトナム戦争の出撃拠点と位置づけられ、新たな建設や拡張が進みました。

平成29年(2017年)時点の沖縄米軍占有施設は、約18,609ヘクタールと全国の米軍占有施設面積の約70.6%が沖縄に集中しています。



沖縄の米軍基地の推移



米軍基地【牧港飛行場（現在の牧港補給地区）】に消えた集落



牧港飛行場基地の建設工事（昭和20年（1945年）7月）
【沖縄県公文書館所蔵】

不発弾

米軍の沖縄戦での弾薬使用量は約20万トンに及びます。そのうちの約5%の1万トン前後が不発弾として残りました。

戦後、米軍占領下での不発弾による犠牲者は死者704人、負傷者1,223人にも及びました。これまでに〔平成27年（2015年）度現在〕、7,489トンの不発弾が処理されましたが、現在も1日2件前後の不発弾処理〔平成28年度実績一年間612件〕が行われています。沖縄県民は今もなお、いつ爆発するか分からない2,000トン以上の不発弾の上での生活を強いられています。



残された不発弾（昭和20年（1945年）7月）
【沖縄県公文書館所蔵】



パナー写真：嘉数の丘から見える風景【伊庭 功さん提供】

戦没者慰霊と平和の礎

沖縄戦の日本側の戦没者は188,136人。その多くは、少なくとも半年から1年以上、埋葬されることもなく放置されていました。戦没者の弔いを最初に始めたのは沖縄の人々でした。戦後、住民収容所から荒廃した故郷に戻った人々は、生活を再建していく中で、厳しい食糧事情にもかかわらず周囲に散乱する遺骨を拾い集め、慰霊塔を建立しました。昭和21年（1946年）に真和志村民が建立した「魂魄之塔」は、地域の納骨所としての慰霊塔の最初です。沖縄県学徒の慰霊碑「ひめゆりの塔」や「健児之塔」も同時期に建立されました。

1960年代には、全国の府県や遺族会、旧軍関係者によって、戦没者の慰霊や平和祈念などを願う慰霊碑・慰霊塔が糸満市摩文仁周辺に数多く建立されました。摩文仁の丘の「近江の塔」は、沖縄や南方諸地域で亡くなられた滋賀県出身の戦没者1,697名の慰霊と平和祈念、沖縄県民への哀悼のため、昭和39年（1964年）に滋賀県遺族会が建立したものです。

平成7年（1995年）に沖縄県は世界の恒久平和を祈念する記念碑として、「平和の礎」を設置しました。「平和の礎」は慰霊碑や合祀場所と異なり、敵・味方や軍人・民間人、加害者・被害者、人種の区別なく沖縄戦で死没したすべての人々の名前を刻銘したもので、悲惨な戦争の記憶や教訓を後世に正しく継承する平和学習の場としての意味を持っています。



近江の塔【福島栄寿さん提供】



近江の塔碑文【福島栄寿さん提供】



ひめゆりの塔【福島栄寿さん提供】



嘉数高台公園に建つ京都の塔【福島栄寿さん提供】



福井之塔碑文【福島栄寿さん提供】



のじぎくの塔【福島栄寿さん提供】



三重の塔【福島栄寿さん提供】



岐阜県の塔【福島栄寿さん提供】

※福島栄寿さん提供写真は、すべて『知っていますか？沖縄県に建つあなたの都道府県の慰霊塔と慰霊碑を』（沖縄問題を考える懇談会発行、2019年）掲載写真



なにわの塔（【福島栄寿さん提供】

第23回企画展示「沖縄戦1945年 —滋賀県出身の兵士がたどった道—」(会期:令和元年6月8日～9月23日) 展示資料一覧				
第1章 沖縄戦の経過				
No.	資料名	点数	資料説明	提供者名
1	軍人必携「軍人勅諭の覚え方」	1		谷正三さん提供
2	遺爪遺髪袋	1		谷正三さん提供
3	水筒	1		谷正三さん提供
4	飯ごう	1		谷正三さん提供
5	寄せ書きの日の丸	1	Yさん関係資料	個人所蔵
第2章 沖縄へ従軍した滋賀県出身者				
6	鉄かぶと	1		峯森清夫さん提供
7	鉄かぶと	1		個人提供
8	陸軍夏服	1		個人提供

9	陸軍夏服	1		個人提供
10	陸軍軍袴	1		個人提供
11	陸軍軍袴	1		個人提供
12	三八式騎兵銃	1		個人提供
13	鉄製手榴弾	1		個人提供
14	陶器製手榴弾	一括		青島瑞穂さん提供
15	飯ごう	1		個人提供
16	水筒	1		個人提供
17	手記『沖繩戦記』	1	木本さんが綴った沖繩戦の手記	木本 勇さん提供
18	祝辞(高野泉町内会)	1	小西源二さん関係資料	小西宣次さん提供
19	徴兵保険証券	1	小西源二さん関係資料	小西宣次さん提供
20	扇子	1	小西源二さん関係資料。 扇子の表面に「万歳」、裏面に「愛国行進曲」と揮ごうされたもの。	小西宣次さん提供
21	軍帽(海軍)	1	吉田信太郎さん関係資料	吉田亀治郎さん提供
22	軍服(海軍)	1	吉田信太郎さん関係資料。夏用の軍服(第二種軍装)	吉田亀治郎さん提供
23	手帖「随想」	1	吉田信太郎さん関係資料。 吉田信太郎さんが出撃当日に書き残したものです。	吉田亀治郎さん提供
24	海軍大尉任命書	1	吉田信太郎さん関係資料。戦死後に海軍大尉に昇進した際の任命書。	吉田亀治郎さん提供
25	水筒	1	Fさん関係資料	Fさん提供
26	千人針	1	Fさん関係資料	Fさん提供
27	革かばん(函囊)	1	Fさん関係資料	Fさん提供
28	胸章(航空胸章)	1	宇野栄一さん関係資料	宇野博己さん提供
29	胸章(空中勤務者章)	1	宇野栄一さん関係資料	宇野博己さん提供
30	陸軍特別操縦見習士官ノ徴兵二関スル調査ノ件	1	宇野栄一さん関係資料	宇野博己さん提供
31	陸軍特別操縦見習士官第二次検査施行ノ件達	1	宇野栄一さん関係資料	宇野博己さん提供
32	陸軍特別操縦見習士官志願者第一次身体検査施行ノ件達	1	宇野栄一さん関係資料	宇野博己さん提供
33	掛軸の写真	1	出撃前の宇野栄一さん達が記した寄せ書き	個人提供
34	手記『第六十二師団(石) 師団通信隊 第三五九九部隊 無線中隊 七里分隊の沖繩戦』	1	佐敷典勇著。2001年3月	七里伝夫さん所蔵
35	戦闘帽	1	Sさん関係資料	個人提供
36	ゲートル	1	Sさん関係資料。Sさんが陸軍で使用したものです。	個人提供
37	革かばん(函囊)	1	Sさん関係資料。作戦地図などを持ち運ぶためのもの。	個人提供
第3章 帰郷 家族のもとへ				
38	国民帽	1		個人
39	国民服(上・下)	1		北川麗三さん提供
40	函囊	1		個人提供
41	麻着物	1		個人提供
42	もんぺ	1		個人提供
43	子ども服(シャツ・ズボン)	1		個人提供
44	遺言書	1	左近清左衛門さん関係資料。左近清左衛門さんが沖繩から家族のもとに送ったもの。	左近とみさん提供
45	靖国神社合祀通知書	1	左近清左衛門さん関係資料	左近とみさん提供
46	死亡告知書	1	左近清左衛門さん関係資料	左近とみさん提供
47	ヤシ製煙草入れ	1	岩崎治三郎さんが海南諸島で手に入れたもの。	岩崎三之利さん提供
48	万年筆	1	摩文仁の自然塚から発見された万年筆。軸に「七里美佐男」と刻まれています。	七里伝夫さん所蔵
49	死亡告知書	1	昭和21年の戦死公報。	七里伝夫さん所蔵
50	退職給与金裁定通知書	1	植田市造さん関係資料。昭和19年2月19日付	植田博明さん提供
51	戦時死去ノ件 通知	1	植田市造さん関係資料。昭和22年5月10日付	植田博明さん提供
第4章 沖縄県の戦後 慰霊と継承				

※令和7年4月編集